繪本豐臣勲功記

二編

五

へ遠13
2209
15

特
門へ遠13
帙2209
巻1/15

繪本豐臣勲功記二編五之巻

目録

織田敬倉車治濃刈一圖
屬結親武田
信長発軍勢刈悩補防戦
屬特攻吉岡

秀吉藏山路伯耆陣楠葉言

屬信長帰陣

丹羽林伯耆感藤吉郎大量

屬結緣八角

繪本豊臣勲功記二編巻之五

江戸　八功舎　徳水刑補

織田敬命平治溝別一圓　屬結親武田

天應小雨降らんと欲する時の地まづ濕ふさく風吹ちんと欲する响ハ第梢まづ搖く。

所謂有の稲葉山傾くんとする報禍のせんなるしとゆゑも能奥恰も頑愚小

して部ちゆゑ動とぞ成果るゝ是能もの況事ゆらんなどゝ然やどに木下藤吉郎秀吉慧

き本陣に來張し。織田敬の所業に出るる小信長殊小所の氣色よく平く木下の來ら

まし小日來ゆたく諸軍勢の攻侵んざる當城と今曉一時も過ぬ隙小自芸と一個

換でぞ二の丸樓と案百しゝ偏小是下が智謀ありとて雀躍をるまゞ小悅びあふ。

本小沸騰て喜ばさらく金く若の所運小頼まて。やゞ小信ゞ功ゆるゞんやそき小屬て

意上ゞ死朝找中。敵本丸小退入て必死の威勢と今〜こまゞ是と攻て城とぞ百て。

東海なきーも僅少の自軍もなかく語るべ。且い故山城八道殿の所一門七こゝ都
て滅ーー果せるなん事ハ是所本意ふも僅まじ方便なる衛なる殿から能城なせー
老臣諸士ど助命なーつかさま。滅のこ請こうもそでさば國人百姓のよく義く若
の仁澤ふうも離き。今追逆ど今ましし者も順ふ降して休ー事きん恤き御寛宥
の御法ことそ帰ましまと勧むるふど織田殿ふまと同心ーこなひよく料理やと
命せーこうバ不ハ大ふ寛宥なーー。速ふ二の丸ふ到ま。諸將ふ新と若初らせ大澤ま水せ
使ふ出こーて能登の叔父長井隼人ど方へ謂遣るゆう。織田殿羅の合戰も今ハ是ま
ふて偽器く稀ふふ山ど退城ありて心得ふなさせ僅へ右ま衛殿さへ殿の如ー。況や
此命の個こどや御別意ふるべらんぞと信長の涙切ど忠めーーうバ隼人も頼て能登ど助
命ど仕ふ方ふまバ一義ふ曉ふど同心なし諸將の意ど同合ど。日根野ふ人身物
村ふて暇ふ。あまーさの喜ふ青屋絶命させん歎哀ーさふ號ふ必死と奮勵せー。

勇氣ふ折けて城の窓くくと城ど遁無ふ退散せなん。と事ど決ーて隼人とう。ふ
の方へ逃谷ーーまバ秀吉ま意ど違窪城の男女悉く助命の事ハ勿論ふて。
その門々戸々ふ諸作せる調度金銀衣服まど意ふ隨ふ取持ちべーと誓書
ど取て徇ふしバ城中一同安逸なー。家財諸類々ふ取持へ自家ふの仁人ふ
花ふ色ふ華ふと辞ふる小女童ハ後盼。情殘ふーげふ歎款とふ取ふて退くあれ
バ御ふ取ふ扶使とー。蜜熟とふ老人の息つまらせて僅ふ有ふて得ふ猛き勇
士達も此石見ふ悲ーーあり。つらん涙ふ同情止て稲葉山ど退散せーハ是ふ
永禄七年八月十五日の事なりとぞ。能登ふ從ふ十余人京都ふのさふ有ふ有ふとぞ。
夫ど頼怙ふうも連ぞも覺束なくもよりなり。呼痛ーひふる道ふ入道宗祿ふ二名平
ふ當城ど奪取ふ代相傳の今日まぞ。こ十ふ年ど得ふしかども本下ふる後ハ
個のさめふ一條長良の道ど侵さま。遂ふ彩ふ果ふ見ふ是天命の去ふ所ふ

牢城終ふ
窮て
龍興主從
稲葉山を
退散を

和ふゐん然りとゐ稲葉山落城せしゑば濃列一勇織田家ゐ属し國人帝
しゑく出仕して尾濃静謐しけるゐぞ信長卿集望ところの本意一時ゐ達し
うゑそ神心を傾けて忠を悦び其くの功はよりて恩賞こきめるそゑゐ中ゐ
も本ゐ秀吉ゐ功労ハ筆ふるゐ尽せしとて濃ゐ列二郡の地を賜り郎別役の城を
こらしむ此之郡ハ安八備ゑ遠遺稲葉山をふ百〜晌酒瓢の号をもて易ること
二の丸人数をもゐ記窓笠士をも換ぜをして書落しゐ在今の郎智旦ハ軍の吉
例ゑきゑば此後ゐゑの瓢をもつくこと旁ゐ門標ゐ用ひよとそこきを許されゑひ〜ゑば
本ゐ面目の身ゐ余り恩を謝しそぐ退出〜ゐゑら心の中ゐ思ひいきろるゑう遠瓢
を馬鞭と色し軍中の功ゑる毎ゐゐき瓢を一枝づゝ指加へたやと思ふきろるゐ果して
他年数ゑこ千を瓢といふころろゑ義ゐ仁を以の塙尾義助ハ憑らを九十日余り
本ゐ陣ゐ遠留〜ゑるゐ稲葉山の城跡てのち帰らだやと謝禄〜ゑると秀吉

さゑぐゐ留ゑ人〜ゑば義助黙止ゐ御辛〜て織田敵ゐ仕ふん縁ハ亡父の遺言ゐ背く
ゑきば嫌疑話ゐさゑきとゐ臺遠目乗朝暮ゐ本ゐ大人の懇切を敬ゑこと忘ハ
念忘きゑゐく推つゑ遠信仕候つゑきろ〜忠義を竭〜もふさんふと思授て重ゐそ
小国秀吉義助ゐ義を感じ我名の一字を分與ふく言嘱と号らせゑきば義助
おゐひゐ謹慎ゐ〜朝夕を二ゐ仕ふ〜う此人後ハ浅丸後して常刀先きと称し総百八十石ゑう 脱ゐ濃列
一圓〜ゑきば織田敵稲葉ゐ山ゐ投せらを遠山の地形を巡覧せらをて〜ゑ〜ゑく覚ゑ
こゑひ清例を此ゐ移さゑば〜と思ひ起せ玉ひ〜ゑば今まで敵藩の縁搭ゐ成ゑる門塀
矢倉を壊却回匝ゑ隍溝を穿凹げ新ゐ城を築ゑんとこきを評議〜玉ひゑこゐ苟且
ゐらぬ尾濃両國その守護職の居城ゑきば誠ゐ容易の經營ゑらねど頼て本ゐ先
年より遠源量ゑるをもて最難〜ゑ真事を設ゐ一村一本といふ貢を積せば五年
已来貯ゑきば〜ゑ〜ゑ数千本ゑ異ゐ醍〜う慎てやゐゑきば遠遺人事ゐ激

秀吉堀尾
茂助を帰
服して君臣
盟を結ぶ

普請に用ひらるゝとも憂しとらざる。且百姓を労せざるして年法中に成就しけるに。織田殿
此城に福徳あり。勢に岐阜と唱号を改り。信長武威を尾濃に耀し。
天をも翻すべき拳止あり。今は聖〻遠機に接ぜ。四海の動乱を鎮静め。天下を一統せざんば
あらざと思召立らるゝとも猶濃國に別敵あるべ。彼を大義を疎忽に発し。軍を他
國に出さんと金光瞞を得ざれば。そもゝ中に也も甲陽の武田大膳大夫晴信入道
信玄は東に北条と双の老将とのひ。今川義元と親しく中あり。無ば後顧の憂直を
絶助。境土を侵す事もやあらんと東日に北条と憂ひ。武田と親を結ぶ
ぞんが如く上洛ありべし。と使者をつて懇懃に音信を通ぜる
古老多く一度も逆徒をる謀し。信長の志を不満多し。是歳濃列を攻始げ。
会多くして糧富ることべ。武田の軍略おそるゝに足らざ。さや信玄と一戦を〻。手ゲ
降をうんせざるべと。永禄八年五月の初その事ありとぞ。本下頻に志を

練めて今英雄あらざ。御平に属ぶも人心定に帰伏せざ。且こゝまで家業
苛政に疲れし民をまぶこゝを得る時猶ともし。然るを名家の信玄に歌
ふ大事あり。怪て甲陽諸代の居家のごまも功労選し。智勇兼備の
面〻をまぶこゝを謀る事容易らざ。況や勝利に乗じ。経多に事に拘う
至つて大事の機密を失ぜん。彼に相憑ぞんに信玄者の御使に逆答
寡勢ざるに者を誅まらるゝをまぶそゝを語り怒りをまぶ。彼古人道に背
よと嘆ぜまを至ふが残念あり。右中も左中も厳邪らぬ中をまもく親〻ゝ多し
あぶ後今信玄を張ることも逆に若に感伏ゝ忠ぶを以〻信
長ゝに同心ひ然が武田を敬ぐ。彼御ありやと宣ふを厳作智謀忠
こに信玄をまぶも今御家門の女儀を守ゝ者が實の姫君をうと御披露あり
てその姫を信玄に愛子勝頼の室家とをきしめ玉ひあぶ信玄をうらざこゝ

恢び老臣諸士も同心まことに〳〵。信玄をぞふ緣者と云ふべ所と語の後称もう氣
於〳〵事あらんずと道理つゞらふ濱說を織田殿ことを聞とし玉ひ潛別
岩村の城を。遠山修理亮頼景の娘あるを此年十四歳ありうるを世女
とせ。頼景は織田殿のおばむこなるべそを姫の
侍女女多り流布幸遠山勘左衛門とあふは誤也
〳〵。婚姻の義を言授るまゝ信玄思惟せらるゝ。織田より信ぶくるを
自一遣も迎を出せ。勝も怨まる色なく。年子を出らを使者をさし越遣
遣は美濃を欲有て武威盛んに振ひ。ゆゞら新の如く富越をと備へ信長天
下を望を上洛と急ぐ。うとく惰る信長ふこと好松永を誅伐させその
後まゞふ遣信玄上洛をとも遲くし。渠今娘を送らんとをるを人質を出ゆて。
よくく頃を妨嫌ありひ懼怖ると知らまをう。教他の信ふあらぢ人の顧量ふ言
勝るを。いかむづきふるあらぢとて。掃部助をつ出さを織田より来をを

信玄諾受せ一旨を帰りて強ふ使ふ。やを迎答ありて使者を返さを。同年十月十旨
吉日ありとて輿入の式をあるをよりを信玄ようも。遠遣和て織田家へ使者を
立てらををう。信長大ふ悅びらるひ十月の末ふ調度をとの〳〵姫君をりて甲府へ送り。
四郎勝頼の室家とせらを。明る九年の冬。姫君をくも男子を産〳〵あり同じく十年
の秋男子を出生をしくをう。女子の歟。大方あらぢ。別て信玄ことを愛ゲ
武王丸と稱〳〵るゞ總領ありとて武田太郎と草ゆをう。信勝也。然るふ遠姫を産後
ふ程を絶ふ養生を手いをを。脫魂ありて多ひ〳〵。信長年を六の死傷ふ思を。而
後親〳〵をうをてくあらんと。憂ひをふ色を見て。本ト葬び教ふをあり。遠遣武田
の末法娘を婚男幸姫所曹子。城之助信忠也。〳〵輿入命らをべきよしをりて。惠を色
玉〳〵と勸ゆ〳〵べ信長芸の掃部助を使者ふ今上。甲斐ふ来〳〵。遠詞を惠入をを
ふ信玄異儀なく語ひ〳〵べ同年の十二月聘禮の使者甲府ふ来。信玄より

滝山城に再び縁者となり。遠く武威を援助せり

信長岐阜勢列に惱殿防戰 附攻高岡

大丈夫の心決定せり猶豫しつゝも。晉侯のさめかい宛風箱に濕るが如し。然へ過日織田武田の結合ならば親戚の誼。婚姻の縁故あらば今こそ東に氣炎ひそめ。西に活路の計策をもとめ。井蛙をやとゝ笑ひ。ゆせども這箇糸都かと好松永。繁かに私の軍して。發動更に上らんとす。且かつ列の佐々木家かい内分の諍闘ひまを。岩に蔦かい絡次寒り。生き殘り殘義あり。そもそもかい將軍家かい近臣都かたまさねば織田殿と落の。然しさち自然と延引せしさりとて。然かは一人事勢列の艦守として。葉名城かさし居し。瀧川左近一番乗り。使者を奏じて告げるやう。一番自力を刻まし。鰹に葉名の城を有。固めて進ぜる。小伊勢ありる関神戸横をどのふ侍士軍。武勇かは長ど智略かは秀。一番渠倆を歌とて。侵掠ゆん事容易ならず。然るに者氏所威光強く。弟濃一圓を攻ふり

さるべし武田とをして縁者とし。玉ふこと依のよしを所傳。勢列侍士恩かは恐怖を懷きその。お強へ招ぎるかは使節を送り。葉名城へ便宜を討め。降参を勧しめる。軍旅をこぶる。多く見えて進。此勢威を續やこまそぞ。所出馬をしく進ちえば數郡を攻ふ玉ん事。掌の珠を奪ふが如し。所望くもちらんと頻に伸べ所しめ。大かは勇を起せられ。昼晴かは陣頭ありる。を本下離身奉ゝ。今勢列所背向の事。所延慈ちるべきうゝ縁故別儀かは進ちそ。武田へ婚姻ましまゝ。姫君逝去ありそうその後間も。多く進かは干戈を動し玉ん事。信玄公とも思ふらんと所思意あるさ。所謀ゝそ。うゝ頻かは言はゝ。織田殿ゝも。織田殿ゝを用ひ玉ん時は得ぶゝ失ひ易ゝ。思女。ゝ悔の忘種かは疾出馬して勢列を攻ふ。なんと思ふ。思ひて謙言ぶるのぞと。

同年八月廿二日。尾濃の軍勢一万余騎。曜を曜々とする旭とともかは濃列沒収奪を奮。

楠正具謀計を
醞しく山路
彈正が
諜合す

餐恋の徴おろそからずして軍軍ゞ譚ひ至ひ直小手祭近隣の敵地を敷て
而敢失ひたゞひ自軍の威光を顯示さるれい小伊勢法城々小い防戰の準
備ちきまゝし。是小國ゝ領地より攻取るべきやと評議しるる小當近より八
田の城を（柔名郷夫田村）攻べきよし小事決まりこ千餘騎を當的らる。然るる城の大
將い横山威の後亂横七郎左衛つ正具とそ。此人程小者らぬ名士を將ゝし寄ゝ
然と固めり。正具平生小名士をよく練りく是の徴を戒胸い智を布し。
ゝ成時い武勇を奮ふさまゝども曾て功小驕らず。我意をもつて威を示め
さず草小横延尉法風韵ありとそ。他金慎傾くれど小外見い柔弱ゆゝ多れ
ども。數年堅固小宰城せしゝ。織田勢あまゝこゝ小推進を攻まゝ堅ゝ小後
ゝ僅五百有余の軍勢。大將正具ぶ指揮の隨ゝ同ゝ共是小攘きるまゝ進
ゝい大勢ゝとゝ。ども。血氣小惰ゝて隊伍も亂し單騎急小攻臨さんと溝小跳

揚堞小把ゝ。破らんとする所を正具よくゝ流視ゝて。暗号を一抱ゝ多ゝ
ゝ。ゝ面の寨據ゝ。積蓄ゝる大本を雲両の徴くゝ地塹々々拒抗ゝ小
遮ゝ。ゝ進ゝ忽ちゝ小撞き。ゝ二百余人撤を負ふゝ小是を
ず。信長ゝを聞ゝ。今天ゝ下ゝ合戰小自軍の諸士員多ゝ失ひし
こゝ遺恨ゝ。ゝ義ゝ小ゝ猶豫ゝ。大軍をゝ率ゝ猛流ゝ。ゝ
猛叫ゝ。ゝ堅固池田城幷の面ゝ五千余騎ゝ。ゝ地小攻落え
と喚叫ゝ推進ゝ。遠ゝ本小森吉郎ハ信長の内意ゝ留守の貴尾總決衛
後ゝ出陣ゝ。ゝ漸ゝ今日業色暑ゝ。魁ゝ敗軍の事を聞ゝ。大小怪ゝ重ゝ。
思ゝ忽ゝ諸士の軍行今更杯憾ゝ小ゝ。ゝ當城を正具ゝ。容易の敵とゝ
ゝ。ゝ小ゝ平日小同者ゝ。諸國ゝ出ゝ。詳小諸士の剛猛賞愚ゝ称る。
そゝ中ゝ。ゝ異ハ小才ゝ。ゝ士ゝ力ゝ。攻ゝ。ゝ者ゝ事の徴

べし。且亦八田の一城を攻落しなば以餘の城ハ踏まずして八田城を
堅守おるべき。岡神戸の両城を攻めば、是ぞ石を穿て水を求むるに似たり
と勧めしかば丹羽森なんども這議をよしとして。俱ふる君を勧めたり。信長もこれに
随ひ給ひ八田の進発を沿逸さんと使番をぞ発らまうす。然程に柴田勝家
のこ将ハ五千余人をこと隊に領ち八田の城へ進るやのなやこと方とり攻寄り呂一搦
と揺起まど城中たちしも臆気なく嘲を笑めて闘ふを厭い城にこそ籠城ぞ。
厳しく攻とと拵揮しく初戦ふる懲りぞ諜に把を登らんとするその手強をまこと
組の穿鑿いとまなく石礫矢を情気なく赤幕抛り投ぐやどふそ得の柴田もせめ倦。
呼ぶ惰をと歯がゆしし。城を眺でなさうなる。徳る所へ使者発来り君の命を
傳へしかば。憑念なくなる軍を止め。勝を獲めて退陣をぞ八田の麓守ふい。
福富平左衛門此人ハ信長勅當なられしを発吉測狙れ栗平賢物あ人ハ一千余騎をぞ

添て城より東ハ隊伍を立させ織田殿ら離軍を率ひ宮島の城を攻べ
とて。六里七町の行程を一時半ばかりなるせうう。并も宮島の城とのふハ西郡。宮島
川の南ハ有り。神戸と東西ハ有ひつらなる。城主ハ神戸義人長盛の一族山崎譲正
信盛なり。千余人ぞ揃給る。信盛原より武勇烈しく軍配も又功者なりぞ
おしも屈せる色を見せるぞ。虎口くを持固めて信長方侵やと待儲ら傳給
ハ織田信長一万有余の勢をもつて城を近く推進る。敵軍ハ吸天ハ地代
りて。森こと左衛門丹羽五郎左衛門ハこと千余騎を興ら軍ハをつらて進るぬ。
手流うち蒐つて蒐息をも續て攻起る。城兵こまハ怖きもぞ全でく鳥繞
好ぬとあり入せどと敬うけて。を当逢と防戦ふ城を強さそうハ要害堅固
山城をこそ進ぬいかど猛くとも進むハ道ぞ。ふ。信長人ハ怒りて多人数軍
一騎ハ攻投やと烈しく死指揮を本ハ奉所。織田殿の馬若ハ暮ら達嫌ぬ大意

火攻落さく見へ候。今日の夕陽のきべ不和安内の敵地ふおひて。兵軍をとることを大事なき。安く神戸を退去らきと。然るべしと。信長憤怒おさまらざれども。城も容易ふ落さく日を徒傾くふ御を得ず。柴名田城へ帰城しあふ又を言国の城中ふ織田家の軍勢一攻して退陣せしことを喜びさしと。程も堅固ふ防禦の全備し。兵を守りて穿城を遠晒植眞ふ進発当城を動退き。神戸を国ふ裏向ふ。彼城をきびしく攻るとしあり然ども山路も功者なきべ。左右ふ落城をべらるべ。今織田信長遠国ふ長く干戈を揮ひ疲痛赤練の国人軍陣を為て先陣ふ属べ自方ふ大勝あり。右ふも左ふも織田を絶き敵国させんと計議を宮め腹心の臣を遣して。神戸を国へ申ふ。織田大軍ふて囲むとも。四五日を過さらも西ふ慌て帰国さるべき御あり。彼く防禦ふ至へ。然中を国の城外ふ出ひ義りて行本あらふ敵往進るふ妨とあり

守ふ宜便とあるりの方ら敵より焼晒ふ自分ふ弱り自方より焼晒ふ敵弱りて進路を妨くべし。此火ふ敵ふ難ひ怪しき。戦を忽ち乱を養ふそのうち西ふ順謀計成ぬべし。勢めるを言送る是ふ係くり山路平広その準備を構いさり。然るを織田勢ふ織田勢ふ為の城攻利をして空しく柴名へ返させる為ひ憤怒発を衝ぞう。一度を千兵と後嘆し。汗の早天ふ柴名を馬し。吹日の如く八田を歯守。神戸の城へも兵を当的をして自分ふ蓄地ふ為国城へ推進ふ。織田勢諸将ふ指揮せらき。城下を進路窓りきべ民屋樹木を焼掃ひ潤道ふ為てきらくべと命ふ兵士們生徒。火を敵をとする所ふ。ひとも討ぬ林中より。爆々燒と呼彌。怒烟虚空ふ捲騰り。殺火縦横ふ吐発をこきやとぞうち騒きき。龍生じて進をうぬるを本下御示ふ言来り。こまへ山路が計器ふて進兵ふ狐疑を為さんとあるう。猛火を諸軍を慰もを。猛火全く活り兵ふ敵の刑亂

山路柿の謀を受て城下の竹木を織田勢先んじて焼たいる

小題ふて。計らひ有あると言はせ。織田殿こまを同心し玉ひ後ふ隙て勤へきう。秀吉
落び進出さらば速ふ諸軍を操寄四方一時ふ攻寄へ然ときんば要害のよ紀とあし
きと自然紀と悪きたべし。要害のよ紀而ふ防禦の名士勢ふらんふこと口より毒地
ふ攻掠ふ。操落さべしと悪きたふぞ毒ふより好む勇戦ふきべ。承時同心ましく先
陣ハ柴田佐久間が二千。退手一面ハ森可成右の方より
丹羽池田二千余騎ふて攻起る。備本下ハ遊軍ふて大将の陣前ふ勒さきふ織
田殿の旗本ふ前田林佐を梁田左右ふ連ることを勝四千。諸隊の攻形いろふぞと
見へ物してぞ左まる。然ども柴田佐久間森坂井丹羽池田の六千余騎二方一時
ふ鬨声をとつて。多統火箭を打ち鬼射鬼鳥銃を放起る。勢威さるから烈ふ火
の像く怒潮ふ岸を撃てたきまりく。然ども城中怯きもぞして統薬の續んなり歩
卒し射撃し拒抗るふ進ふもおそく攻起りを起今天

遠城を隙さぞんがふ面目ふ軍をおさんと。喚叫で責ろうる本下ハ城の態
を瞬もせで闘ひるが。嫌ふ多く右ふ集り。必死と為て防ぎども左ふ防士勢
ふ。て切大事ともおもへぬ様なり。然ば左方ハ要害屋ふ入きたべを憑むと覚へう。
先彼方より攻掠て隙し。そべらんと。毒ふたふより。織田殿大ふ悦だを。佐久間を魁
軍とて。一千余人。鳥地ふ攻掠。柴田佐久間丹羽池田もこまふ力を勢をべし。と
指揮ふ。ぶきも必死と為て。面も顧らで。掛鬼こう。山陰ハ八方強迫て。強卒を励ま
し。防ぎるが進ふ。只今左の方を攻起る事。火急なり。此口ハ要害堅固なを。老ふ
ふらいと思へども。進ふの稠く見へるから。拒抗の人数を。惜ぶ。と左方の虎口へ
勝らんを。本下。秀吉。既と。顧ハ遠晴ぞ。有を。後け。継けとぞ。
馬ふ。掠き。必魅ふ。進めば。當陣の名士一千余人。多統稠く。歩鬼く。桃弦るふ
丹羽池田も。後来ぞ。ぬ本下が。新攻起る。遠城の隙と。観決し。事ふらん。後

織田勢巧み
虚を攻く
山路彈正を
轉倒

て指揮烈しく呼さる声小二隊の兵士勇氣活く突撃し。水火流中小も拒
づ兄様也我等らじと攘くやど小城の防御小際も隙隙なるまど進兵法魏強して。
寨樓をとりて攻落せり。あまも遠城官僕遠隊より奏隊さまんどさる石小山路
彈正忠づ兄、能く補が教指しい今此時の老急なり。進兵を離して試みやと思ひ遠
くも法寨上小先登す。進軍の方へ高宮へき恩賞あり責はを繕めう多くと大書声
小呼さまど柴田も馬を驕出して陣奏はるる中も岡城小中と呼り返さと山陰信盛
使隊奏をつるまらん小こも奏禅を大將へ東傳て呼さる声小柴田
佐久間使番を走らせて遠由を言はせ。信長大れも歓受しら多ひ始く攻門を
寄せまるを〜と四方の隊中へ指揮せらるを。小下更小所ぬらして疲家猛き上
と言を烈まし。樓起こくせ也墓らと織田徹も小止め至へ秀吉ら敵を
ゆく軍士を纏めて後口をとづ小退て動へ〜

秀吉議山路偽陣補謀計　信長帰陣

鳴よく斗米を熟をとの〜ども。砂石一斤況ぞ。能ば遠遠を岡城
あまも隙べく見へ〜しが事建さどして軍を止む。此時彈正寨樓より式使を〜て言ナ〜
人〜更小ぞ鉄炮のあらん限りを防戦し〜まあらを事。弓馬の家小生まれ〜分の通関
氣小守りつまども最已運尽を力竭こ言糧絶を〜ども戦死をべきを
助命を救〜玉へらば岡神戸の城を〜も勧めて降参をもらさん渠們所將信
小兵をこ兄んば敗北全く所を小屬べ。遠義所辞作らを今青の中小調略を
べ。若所辞客の兄小於て是非小醍ぞ城を傾く新て齋藤を沙場小晒をき
小と命を客る小柴田佐久間織田徹の所第へ出山陰ば兵今の事を右相遠を〜ん自軍
の大利と来こを小過べらば所賢を〜と同ひるを。信長能小心決せど今隙を
べき遠城を辞さんぞ〜ん小あらざるとも岡神戸城下の城を攻伐ん事自軍も換

ぜん諸將の異見を聞たゝと柴田佐久間丹羽本多池田坂井森若田佐々林等を召
集め織田殿命ぜさせらるゝハ山路彈正方使金く弓折矢を以降らんとし見苦と
神戸の両家を將佐ふるべくふる武士ども
ゝく言はしたべしと命ぜらる柴田權六進出たゝ山路が事ハ
見ハ疑心を解んゝとめ實神戸の両家を勧め殿とゝて功ふこそんの意あらん然と
きバ遠義を所詳ゝく攻殺さんと出やゝめと申ハ自ら若干換ゝ敵ハ
勇士輩を殺さんことも本意あらゝゝ將佐とゝて思仕さを以當國征の人を利ゝ
ゝ今又所幸國も亂ゝ早く御帰陣ゝ事無ゝ存ゝ
憚ゝ色ゝく言ふゝ多ゝと木下倒ゝ言を列ましし柴田大人の謂ゝ不ゝ利應所め
きども小居思意を以ゝ山路が專密ゝ條ゝ全く偽ゝ作ゝ関神戸を
の降參紙量容易ゝふを彈ゝ所ゝ心得ゝゝ所ゝ謂いふと思を推ゝ

山路ハ神戸の舞下ゝて関ハ神戸の總領家ゝいゝ山路が制ゝ隨ひ一戦
もせゝ降ゝくゝと所猶下ゝ属ゝ言ゝ彈正信盛指當先急を通
きん空巧ゝ進軍を駆ゝ退ゝ謀計ゝと存ゝ實ゝ降參ゝ
彈正ゝゝ所ゝ書簡を調記て関神戸へ使ゝ
ゝ顧ゝ彈正ゝ城ゝ出ゝ制通ひゝ達ゝ縛ハ見信ゝふゝ作ゝこの
城の落ゝ遠ゝ攻破ゝ関神戸鹿伏兎ゝ攻百ゝ
ゝと弓矢覇者道達て征伐の本意を移ゝ作ゝ
怒て表ゝ降ゝ救ゝ將の仁ゝ偽降參ゝ
の城ゝ侮ゝ死ゝ極て窮城ゝ
山路が願ひゝ任ゝ関神戸ゝ調書ゝ
柴田ゝ同ゝ遠義ゝ作ゝ織田殿ゝ易ゝ不属柴田ゝ勧ゝ

事定まり。權六ハそれにて弾正に関神戸まで降参の義を城中へ言ひ容るに
山路これを返答して関神戸ハ解あつて城を小臣に御預あらうと願ひ
奉るとの詞なれハ勝家本陣に立帰り山路が意趣を演るにより織田殿之
きこと實とし左右のうちに弾正より更に神戸への使者なりて山路が言葉を
それより謂違の文章うくの如しと柴田に内田へせらるゝを疑ふべき條なし
とて織田家よりも副使して神戸の城に到りし所。素摘が肝算なきハ織田の使
を旁く奪乱し。関安藝守ことハ一族なれども柴が心中計りがたし別に使をぞ
達りさん始く猶縁あるべきにし。呼寄ひに返書せしかバ偽とハすべからずと柴
田が勧めに随ひ玉ひ素各へ降陣あるべきよしを答させりにて木下藤吉郎が
本陣へ参上し。降参の實ハ居まらざるに囲みを解くと猶いつからぞ。若しハ其
各へ遣御めさとも城攻の軍器ハ遺ほ不虎口さして守らせなく一個も動さし

悪まとありとのふに勝家誤つてね呼籠るも事によりて神戸殿に若より使者に渕
して返答あり山路と同心なるをつきよし。心実に實なりしつるのを然ずまさハ山路を
将従にとりて大忠臣の侍士なりそれとも何ぞや疑ひ候しを囲を解かざる縁故あ
らんや弁も又足下ハ翔よりも山路を悪しとあらずに西志然まで婦めとおぼへ
とり公衆なれらぬ心中なるを旨るも木下冷笑ひ寡くし汝詞宜ふの如神戸殿を
詞ハゆふに及ばず親子の人質出しても甘しの世の中なるに方便當城を弾正を
こまでず其詞とゆふに練まぞく見示議議とのふも只一言の道理を折そ我召に
惑まらさま帰り時に貴様虎口を赦し御帰陣あまりハ底事なや神戸の城主へ遠
方の使者に對面しそのまふにして其を降参の證とせんとの殊に深恩の御計ら簡を
山路と神戸ハ一族なり遠に事を謀会せ欺き討の尋常ならまへ書輪や口状ハ
情としかし城を遅與へ人質をもさしまし一なを自身が御陣へ来参らずこそ降

秀吉柴田と
軍の進退を
諍論
する図

参会の諸将もいかんが然るべきとさらちハ軍士の退散なりともよからざると評議すれバ柴田なきとく悉
發し既に事よと見へけるにぞ諸将らも今二人を宥め種々とこれを執扱へども遂に承引
て謂ける。さればこそ織田殿にも附しめされ木下が道理を立て間ならバ然れどもことに随ふ物ハ猶六
国を失ふならん如くぞ双方を達んとおもへバさらに城を棄て軍勢ハ木下が義に随ひて留
置なる陣でのこし柴田が義につき其余の大名ハ帰城あるべしと是を越て徇きし。木下が勝に池田
丹羽と二千余騎ハ城を囲ませ大将ハ其余の大名ハ退陣して居ふ信長ハ濃別の早馬の使
者到来し甲州の武田信玄西美濃之人衆の働めに恐るる岐阜の城を窺はんとの風聞
きかなしで国中恐怖し安途ならざる早く御帰陣あるべしと告るに信長驚き玉ひ
甚だけなき大事ぞ出来たり。いぞぎと諸将を集め各々の異見を尋ね玉ふに
意も斬て云句を発さず物察に協列出るの時。木下が諫めしハ是なりしと御心
つきたまへども此期に及んで詮なしと臍を噬で立ちて共へ次第親使到来して軍

衆勢をバ既に伊賀口までも發向せりと驚て告来らせて遠騎柴田進出て既に當
國の事においてハ山路神戸等に任せ置ひ早く御帰国あるべしと申上るに同じく
まひ使番を以て岡に遣されしハ木下池田坂井の個々大将岐阜へ還御なしバ後軍
勢を纏収め退返らしよとの命なり是を聴より木下秀吉池田坂井ふうち對ひ遠
事容易く信じかたし小臣一人残留り得と実ハ居て後再び東に進て是バ甚だ
衆に先て動し過玉ふ事と約束なし。木下ハ従者四五人ばかり具して急ぎ
出て御帰国なさざりしやと問ひまゐらせ信長にも程進の事を告玉ふに秀吉ことに
奉けて岐阜は経伸速息なり丹羽も信玄の軍出る事他の勤めにもあらず乃て旅しく軍
をを発するへからず備ハ西方之人乱甲府へ内通つかまつりて使者の口状書翰の往復
頻りまで密易からず君岐阜城を御出馬ありしハ今月初旬に進べからず今日の日を算
ふるにいまだ十日を過ぎらざるに西美濃より甲府まで七十余里の行程なれバ十日の程

ホハ信ぜしなし是ものを推量ハ謂ども勿論道理なを八田城の補佐言國城の山路なを
ゞ全く繕し流言ホて君を帰まさせまゐらせんと巧なし詞と彩らまてるこ所て猶家大ホ
怒り。秀吉左右山路を思ま。降参せんとて偽とし今まさ英濃の注進も山路ゞ強し
流言ありとホ信ゞ調落と扶ん〻めホ君注御身の危き事を顧ずを動めまゐらせと不忠
きと。從今ハ山路神戸の降参偽ホて勢小の地御手ホ属しのふさぞとて原来御領ホあら
さまべ切せる御接とホホもあらぞ若本國ホ事起らば誠ホ謀り〻くあべを西へ御攻國
の事然るへと言法せしを秀吉一人歯說ありと悪まをとゐを洗接ホ謂ゞぞと座論
席ホ詣るを赤下関て復頻ホ笑柴田殿ホハ冷ゐ紙縛ホ猶ゞらゞ愚ろさよ是不ハ山路
弾ぜとゐホ法の怨切ゐまべ渠ゞ降参を信せらゞぞ降参せんホハ仏國ホも今ゞ作法のハ
ゐれを人質も出さぞ城も遁無さぞ本人御陣へ参上もせぞ遁等の作法ハ第へ
赤死を。是等の作法ゐきをものて實の降参とハ悪されまじゆゐを信玄英法へ輝べ

改阜城中の注進ゆ國城ある岩村ゆ注進ゆをてハ稱ふまじをまゞ俗の約束お遁
せしめを虚說ありとハ存ゞ候君岐阜城ホをを嗚ハ御出馬の義を止めまゐらせ又
當國へ乗りを御合戦を勧めをまゆ。昭晴ホ大功を達らをんと始終繕て君の御
為を存ぜをまゆ外別心なく更ホ不忠を存ぜぞ作是不ホ宿意を構ふゐゞゐを。
不命も祈ゐ赤ゆ。志しをゆら老居遁君を護して御帰國あらんホホ居一隊の名
士のをハ仕をて問ゆ今をゞきゆゞを不もあを名をの御計ひホ隨ふべしと道理を言をて事
ふ意ゆ。を事の朝ホ勝家も承ゆ迷ら不道も多をゞ黙へして世ゆゞ言葉ゞを遁嗚
瀬川進を出赤下大人の謂ゆ和一言生命慌ゆ。理ゞを不ゆを言をゞ又悪ホを
べき方を勧らゞ。ホ居細ホ御出馬を強て勧めまゐらせしゞ今更ゆ〻べを無ホ仰
くを来後悔ゆまゆ。山路神戸ゞ事ホ為のをハ不居ゆく〻虚實を弘。御涙ゆ
使者をを言法ゆまゆらんと悪をゆふゞを侵御帰國ゆゐゞきゞを。を惣軍中へ觸

出さる。坂井・池田なども追ひ返し、淀草へ御陣まします。

丹羽林伝感羅吉弟大量屬結緣江列

漢者の鷗の来たるを見て大漢あるの相と識、樵夫の蟻の集散を捕て樹の好惡を量る。然ば本下の国城主の所行を視て降参の真偽を識とのべども、辯えがたし。諸士小任せ、信小潜列へ退近し。柴田佐久間が過失を歎息して、計策のこと発こそ猶居たつらし。信濃堺より伊京の郡もとび甲斐国隠まで、悄く地小窺ひ、せしかとも、崖流流をかして、然も信玄入道の六月炎小甲斐を出馬し、角比まで信列ある。川中島小對陣せしに、たしかふ見と所微わり寡小淀草へ云はせしかば。信長大小感じ玉ひ、本下が遠意を賞美せらるる。西方の人、元が風波の根を知さるに、是もとより更小その紀事なきに、神文を筆て孤疑を散を見象掃正異の謀をて新へ流をさせしかり。信長方後へ甲列の沙法の崖流ありとて人

元の神文起請小安堂〜玉ひ、所心乗をうひし。秀吉密小言ふ小そもう兵ふ小そもやこの人衆も仏の意趣を雅らん。然ばら。遥等の事を種として心変りのもりを、もちろん見ることを畏りかし。渠俗小安心をさせんとぬふこの人一回の小とを賜騒の偽ちうやと切小動め奉りしに、織田殿中も感ぶ〜とて村井長門守貞勝を使者と形〜。この人衆の門を、古刀一具小絶一重ことを賜りのもく遠意の所趣東賜玉ふ。この人元護で辞受み〜。帰時小淀草へ伺ひ〜。寛信安法の喜悦を濃ろ。信長所へ瀧川雄ろ使者とりて岩倉山踏神を降参へ今くりて緒中を若と所帰国ゆ〜こそもちろん謀と知ることを、釋も得と知さんとめ。山路が詳へ使者とつちまし。降参の事を信長せ〜小和て使者を帰り笑ひ。信長再び改地小来ふ兵今川義元の風小較ふ。十日とい出陣さるるど。ど匂りて音を信仲キ〜ば信長を所もおそらんぞ躍騰りて憤怒ありし。義ちば帰時小推進山路をもとめ神戸の奴

仰慶ふして、ひまんなどと思城中へ伯らるる。本下秀吉義所、人ふ諫まるらるる
事。敵も防戦の全備せ〳〵へ悪口ゆして君を怒らせ、汝まるらるる計畧
ゆらんまづく姑く流言を避さる。時節を御待まるべし。貴方も信長所し
め〳〵本ゆ方が謀を用ひず。屋國せ〳〵縛を脱めども遠郎ふ及んでまた甲斐なし。
いかふまでも本ゆ御帰國あるべしと悔まるるへど、見まく始めの御落胆
なる和謂い業名ふて小居ゆ剛ふ屈せるへ。柴田佐久間の老臣達宮ゆ本ふ
ゆ。ひ〳〵ゆ家仕の臣として其言ところを用ひらるべしと。懐の金り君を慢
ものあらざるべ計らまじ。然ればまた勢北の地御ふふ屈ともも老臣は意を
失ふべ其功為く進べし。仮若御帰国あしゆ柴田佐久間も本意ふ稱ゆ。
若臣安穏ふ事を縛万歳の基とゆるべ。勢別の義い遥さう遥き
ふ。ひ〳〵き藩本ふ屈べき國ゆ。御心窄くゆ。ゆ〳〵ゆ。と云ふ織田殿ゆ。

吉帝が功ふ驕らゆ。老臣佞臣重んじる剛を深く感じる。ひ勢別及ふ怪ふ
再び命せ出ざし。遠嗚本ふ両藩と。柿佐渡ゆ丹羽九郎左衛門御浪ふ伺候し
て缺ゆく所有。肝ふ落じて感佩ゆ。渡ふ本ふ別忠ふて。功ふつのらぬ名士ゆ。
尋常の者ゆらべ自己が先見の至る小驕ゆ。柴田佐久間が矣と義へ驕りもし
誹りもしべきと。厳ハゆ〳〵狂て自己を謂の行まぬを悦びる。其人量ハ劣りて。
凡人の及ぶ所ふゆらざ。そもそも知らで柴田佐久間へ本ゆを妬むこと嫉ごとし。
長臣の身ふ似合しゆらざ。ゆゆ本ゆ柴田が中と和せ〳〵と丹羽林遠剛と共ゆ君ふ
伺ひ両せ二藩して和議を調ひ御前ふ於て御器を賜りゆまべ双方皆弱く謝〳〵参らせ。
悦合ゆて退出せり。或時本ゆ前ふ出家ふ高ゆ上りる参別甲別ハ御縁家ゆ三べ。
是ゆ気燃しらざるべ。只御上洛のあべしゆちふハ上方筋の國物ふ怪心ゆゆハ不都
合ゆ。然中江列ハ王城の地ふ近くして。関東通路の咽喉ゆまべ。彼一國を親しく

藤吉郎君の
義諫を容く
丹羽林侍
感嘆せむ

みさび京都の往来自由を儲く。所謀官方端忠うるべく作。僥倖江列の佐こ木義
弼のまごち室を紀りしみるべ彼屋形へ緑詰せらるべしと言ふを信長遠議
誠小良策のまごも。義弼の心計りぐさし怒小朝をを出して。倘朝ざる晌。面目を
ふふ事ならぬや。と命せふ木下遠所使ハ小臣小命廣らるべきるべ。江列まろ上。
調し俗らえんと望むふ信せ真方亡角へ奉りみべ必定事成就せべ。と昇使節
と命ぜらん。木下もを答。加藤を汪使者こる時とん。乗況換りる必真ふて城るごみ
ふる倍とも石列。巍を怒として江列言ふ。覩意寺の城小列岩ふ。織田信長の使節
木下藤吉郎秀吉。急ぎ上の由を奏聞しるべ常番の会士生迎へそるく小言ふ決。
本丸へ達しるる小義弼喜ろ乗ことハ。熱志小思ぎるる緯ふるべ早速呼寄る
対面せらる。双方別宿の接遇ふ。ろて。木下草て事しるるハ。遠遣信長面成形へ。
使節をもやう参らせしハ別を怨を。その事ことあるを言ハ信長小一姑の嘉女

こと言り。今歳躋竈と越て候。願ハ遠女議を屋形の廉中小移し居さく存候。
異江濃尾のこ列をもつく。一家の姻を結びおく外冤を拒拠力列く両家長久を
基を固ふを遠義所関容候べ信長ふ大慶自輪小て。使者ふる秀吉も又
面目を施し候。とやう言る小義弼小し然国の無切を表既せつる。ふし家ふ濃姫
の禮を。容易ならざる大義ふ。評定のうへ返言すべ。と姑くふ木下を休息さを饗熱
あつくせらるを。遠ことを評決せらるる小巣頭ふ。障へることも義弼徴しを小
称ふ。信長ふ今注下形を関小苦ハ駿波の被官ふもあるを領国ハ濃尾の西列。
駿國ハ小西方小振へハ渠と隣を事ふ。ふの。倘。信長小緑を結びを助佐とふる偉
名ふるべ。將又渠と恨を醸さを國家のこあ小宜しふる良し思をもつて慮ふ小緑詰を
吉夏ふらんと。商ふさるふ小より家事の西ふ。命ぜしとして評決定きう。再び木下を遣小
逆へ信長命せこさるを。西家結を。結びりふさんとの返言ふ。秀吉大小歓悦し

謝辞を報て故草に返り。依て本の通善を害ぜんとす。信長ひそかに怒を生じ。是まで本々が切作のりとて妻人の事を忘れ給ふ。遠姫君を原信長の寵愛武蔵守信行の息女なり。信行生害せらるる時。一男一女ありしを。柘植清兵衛おづけ兵部に託して成長せしめ。右衛門尉列の嫡孫。織田敏種く跡を継せらる。金賜あまた取りて。當年十月の下旬。岳父を撰て佐く本家。妻人の式を調ふる。聘賜の品々。一族中への親賜。家老以下諸士中まで人の程頃品善をつくし。英を長し六角家の祝儀を新にして。殿が上ふまで人妻の姫君をぞ稀なる美女なりしが。百形と親迎睦ぶく。倩老の朝淺からぬとも。猶ふも信長十六歳にして。父信秀の遺跡を継今永徳十年まで。ぞうの十有九年の間。尾列を一圓ふ斬従。然して濃列を兼ねしこの列甲列と親を結び。方僅まで江列の全形と歩ぶ佐く本六角を縁者とする近武勇の名家を撰び。文を変くせ。征ふ武威を海の外に建さ。天下に建さ。を斬法めせを太平とのさん。人織田敏の外うあぶうらぞと情をめ。他もみうしぶ苅び敬列数向を急ふとべと偽さるるう

終 本豊臣勲功記二編巻之十終